

中田英寿の言動に見る思考

The Way of Thinking of Hidetoshi Nakata

～The Verification from Speech and Actions～

木村崇昭 1k03b0681

指導教員名：主査 宮内孝知 副査 石井昌幸

序章 はじめに（動機、方法）

中田英寿はワールドカップや海外リーグで大活躍をし、日本のサッカー界を牽引してきた。そのような立場の中で、彼のマスコミのインタビューに受け答えする態度は子ども染みているとも感じたが、一方で自分の気持ちをどんな相手にでも出せる強さも感じた。しかし、筆者は彼の真意はわからなかった。そこで中田英寿に関する文献を読みすすめていくにあたり、彼のサッカー選手として成功した思考法や価値観を理解することがこの疑問を解消することに繋がると感じた。これがこのテーマを取り上げる理由である。研究方法は一般に人格形成期にあたる中田英寿の学生時代の文献に注目した。そこから彼が活躍していた時期の思考において共通点を見つける。

第1章 中田英寿の年表

中田英寿は年齢別日本代表に呼ばれなかったことはなく、中学生から日本代表として活躍していた。年表には具体的な成績は載せられなかったが、小学生でも一目置かれるプレーヤーであった。

第2章 中田がサッカー選手として恵まれたこと

サッカー選手になるのは才能次第とは短絡的にいえない。環境と才能を分けることはできなくても、才能があったのかを推測することは必要だと筆者は考える。

(1)環境 自分流の分析力と自分で決めたことはやりきる点において、中田英寿とそっくりであった父親が存在していた。中田が小学生から活躍していたことと、父親が厳格であり自尊心を徹底したこと、以後中田の変わりない考えであったことから父親の影響は中田英寿がサッカー選手として活躍した上で大きかったのである。さらに、サッカー選手として成長するのに充実した練習環境や、それをサポートしてくれる地域の人々や優れた監督が周りだったのである。

(2)才能 エピソードで見る限り中田英寿の才能は度胸と、サッカーが好きであること、努力できること、ズバ抜けた勘を持っていること、そしてなにより自分で考える力が優れていたことである。それは中田を6年間、独占インタビューで追いかけた小松成美氏の意見と重なるところが多い。

第3章 中田の思考

中田の言葉から発せられる内容には「個人」「未来」を意識したものが多い。サッカー選手というのは、自分自

身が商品であり、どれだけ自分という個人の価値を将来的に引き上げられるか、そういう職業であるためにこの思考方法が中田の中で大きくなったのだ。

「納得の境地」と「絶対的自己評価」とは、自分ができていることをすべてやり、プレー後は自分で評価する。彼の評価基準は結果ではなく、自己満足の境地であった。

「中田にとってサッカーは仕事である」と自身で位置づけることから、中田は夢を叶えたヒーローではなく、サッカーが嫌になったり、つらいことを経験する人間であった。

サッカーバカだけにはなりたくないという彼の発言にはサッカー以外のことも負けたくないというプライドや自分自身が文武両道であるべき自己理想が伺える。

中田と議論をした人は彼の考えを正論であるという。そして自分の考えを相手が誰であろうが貫く強さがある。その姿勢がマスコミと確執を起こしたのである。

第4章 中田から浮かび上がる疑問点の検証

(1)なぜサッカーをテレビで見ないのか。

サッカーの中継を見ないことは興味がないことよりも、テレビを見て自分のペースを崩されたくないという彼の生き方が伺える。

(2)理論では解決できない、感情面のコントロールは自分の信念でコントロールできたのか？

選手が、日本代表に選ばれたり大舞台に出場する選手を選ぶことに関与できないという事実把握のもと選ばれたからには自分のプレーに自信を持つべきという考えを中田は持っていた。

(3)自信はもともとあったのか。

無根拠の自信家と思われがちだが、海外遠征などで一つ一つ自信をつけていったのである。

第5章 まとめ

中田英寿は傲慢でもなく、自信家でもない。常日頃から自分の可能性を高める考えを導き出し即実行に移す。そして考えた持論にプライドを持っている。その持論は中田の感覚と現実把握の中で出される。だから一般論になるとは限らない。常日頃から自分の力で考え、実行に移すことの積み重ねがマスコミに出た時の中田英寿の自立した強い態度やイメージを作っているのだ。